

賈誼の「三表・五餌」政策について

森 熊 男

一、はじめに

前漢文帝に対する献策の中で、賈誼は、漢初の国難を次の如くに分析する。「現今の時勢を見るに、一寸考えるにつけても痛哭すべき事態が一つある。それは、諸公王の勢力が強大であるのに対して、中央政府の力が軟弱なことだ。また、国事に思いをいたすと涙すべき問題が二つある。一つは、匈奴の勢力が強大になり中国を嫚侮侵略することであり、いま一つは、匈奴のそうした跳梁に対して漢帝国が適切に対応しないことである。さらに、中国の国状を思うと大きな溜息が出るものが六つあり、(中略)その他にも経世の道を踏み外しているものは一々数え上げることができない^{注(1)}と」。

この分析が、漢初はおろか漢王朝を通じて、まさに正鵠を射たものであることは、その後に漢王朝が採った政治的施策を見れば判然とする⁽²⁾。賈誼の指摘した憂うべき国状の克服こそが、即ち漢王朝の安泰を将来するものではあつた。賈誼は、当時の代表的思想家の一人として、これらの国難に対して並々ならぬ関心を抱き、その難題解決策を果敢に摸索している。が、こゝでは、彼の提示した匈奴対策をのみ論ずることにする。

ところで、賈誼が献策した匈奴対策とは、具体的には「三表・五餌」の策であり、『漢書』本伝賛で、班固から、

五餌・三表を施して、以て单于を係がんとするに、其の術、固よ

り以て疎なり⁽³⁾。
と評されて以来、顧みられることがなかった⁽⁴⁾。小論は、『漢書』賈誼列伝、並びに『新書』匈奴篇⁽⁵⁾を手掛りとして、賈誼の夷狄観を明らかにし、その夷狄観に立脚して導き出された匈奴対策、即ち「三表・五餌」の策の何たるかを浮彫にすることを目的とする。

二、賈誼の夷狄観

先にも触れた「流涕すべきもの」の検討から始めよう。

天下の勢⁽⁶⁾、方に倒に縣る。凡そ天子は天下の首なり。何となれば、上なればなり。蛮夷は天下の足なり。何となれば、下なればなり。今、匈奴は(漢王朝を)嫚侮侵掠して、至って不敬なり、天下の愚を為して、至って已むことなく、しかも、漢、歳ごとに金・絮采繒を致して以て之に奉ず。夷狄徴令するは、これ主上の操なり。天子共貢するは、これ臣下の礼なり。足反つて上に居り、首顧つて下に居る。倒縣すること此くの如し。……陛下、何ぞ帝皇の号を以て戎人の諸侯と為るに忍びんや。勢、既に卑辱にして、既息まず。これを長ずれば、安くにか窮まらん。……臣、竊かに料るに、匈奴の衆は漢の一大県に過ぎず。天下の大を以て一県(民衆に困しむ、甚だ執事者のために之を羞ず。(本伝)

文化的にも軍事的にも、圧倒的優位に立つべき筈の漢王朝が、わずか

漢の一県が有する人口にも満たない匈奴に侮辱され、侵掠を重ねながら、しかも歳ごとに和親の証しとして莫大な黄金・布帛を匈奴に差し出している状況、皇帝を号しながら恰も匈奴の一諸侯であるかのとき漢王朝の現状に（賈誼はこれを「倒懸」現象だといったが）、彼は「流涕」するのである。

これらの記述が、決して誇大に過ぎる表現でなかったろうことは、高祖を平城に包囲・困辱せしめて以来、武力・戦術の優位性を後ろ楯に、匈奴が高圧的な態度で漢王朝を侮辱して来たことに思い至れば、首肯できることではある。因みに、彼が出仕したのは文帝であるが、その文帝紀に、「匈奴、……に入りて寇を為す」、「匈奴、辺に寇す」といった記述が屢々見え、あるいは又、班固が、

孝文に至るに逮んで、ともに関市を通じ、妻すに漢の女を以てし、その賂を増厚し、歳ごとに千金を以てす。しかるに、匈奴数々約東に背き、辺境、屢々その害を被る。（『漢書』匈奴伝賛）

とも書き記しているのではないか。

ところで、上の引用文からは、賈誼の、中国文化に対する大いなる自負と、それを蹂躪されたことへの激しい憤りとが読み取れよう。ここに、彼の夷狄観が窺えるのである。

一体、中華思想というものが、相反する二つの形態をとって発現するものであり、その一つは、国家的自負心・自尊心が傷つけられたばあいにおける極端な保守排外の傾向であるのに対し、今一つは、諸外国・異民族が中国に従順に帰服・朝貢しているばあいにおける極端な開放博愛的傾向であることは、既に先人の指摘するところである⁽⁸⁾。賈誼のばあい、これに倣えば、前者に属していようか。「今、匈奴は（漢王朝を）嫚侮侵掠して、至って不敬なり、……何ぞ帝皇の号を以て戎人の諸侯と為るに忍びんや」というのは、国家的威信が損傷されたことへの痛憤の言辭である。彼は、明確に言う。

天子なるものは、天下の首なり。何となれば、上なればなり。蛮

夷なるものは、天下の足なり。何となれば、下なればなり。……夷狄微令するは、是れ主上の操なり。天子共貢するは、是れ臣下の礼なり。（本伝）

賈誼は、「天子」を「天下の首」として「上」に君臨し、「蛮夷・夷狄」に「徴」召の「令」を出すものと規定し、対するに「夷狄・蛮夷」を「下」なる「天下の足」とであり、従つてまた、「天子」による「徴」召の「令」に服し、「天子」に「共貢」するのが、彼らの属性であると規定する。このように、華夷を上下の關係として把握し位置づける賈誼には、「夷狄は譬えば禽獸の如し」（『漢書』匈奴伝に見える季布の言葉）「匈奴の如き者は、仁義を以て説くべからず⁽⁹⁾」という、いわゆる蛮夷・夷狄を禽獸視したり、あるいは又、「その地を得るも、以て利となすに足らず、其の民を得るも調へ守るべからず、勝つも必ず之を棄てん。」（『漢書』主父偃伝）と述べられるごとく、中国にとって何らの利益にもならぬとして切り捨てるような、排他的な視点は見い出せないのである。

否、どころか、

必ず單于の頸を係けて而して其の命を制し、中行説を伏して而して其の背に笞ち、匈奴の衆を挙げん、唯だ上の令のままならん。

……徳は遠く施すべく、威は遠く加ふべし。（本伝）

將必匈奴の衆を以て漢の臣民と爲し、之を制して千家をして一国たらしめ、之を塞外に列処し、隴西より延きて遼東に至るまで、各々分地を有ち以て辺を衛らしむ。（『新書』匈奴篇⁽¹⁰⁾）

と述べて、賈誼は夷狄匈奴をも「漢の臣民」に組入れ、辺境守備に当らせようとさえする。もつとも、彼が企図するのは、武帝期に見えるがごとき版圖拡大という野心から発したものではなく、国家的威信が損傷され、その回復、あるいは又、それを損傷する者を排除しようとすることから発現したものであり、その発現の仕方とは、古来、儒家が唱道して来た王道思想ではあった。

詩に曰く、普天の下は、王土に非ざるは莫く、率土の浜は、王臣に非ざるは莫しと。王とは天子なり、苟くも舟車の至る所、人迹の及ぶ所は、蛮夷戎狄と雖も、孰れか天子の作す所に非ざらんや。(同右)

一体、賈誼の治安策を貫いている中心思想が、階級制度の確立と礼教主義との二つであることは既に指摘されているが⁽¹¹⁾、それは狭い内政に限られたことではなく、彼は、王化の及び得る範圍の、あらゆる存在を——「蛮夷戎狄と雖も」——上下の身分秩序・階級の中に位置づけようとする⁽¹²⁾。ここには、自国文化の圧倒的優位性の自覚・自負(中華意識)があり、あるいは又、その優位性を他者に認識させ徹底させるに足る威信をも肯定し、一方的な文化侵略を是認する姿勢が読み取れるのである。(先にも引用した「徳は遠く施すべく、威は遠く加ふべし」との語を想起せよ)だが、儒家の説く王道政治とは、同質の文化を共有する民族間・国家間に於いて唱えられこそすれ、異質の文化を有するものに對しては、一方的な文化侵略・文化強要という、胡散臭い代物ではある⁽¹³⁾。

さて、以上によって、賈誼の夷狄観は明らかにになった。即ち、彼は、夷狄(直接的には匈奴)を中国文化の中に、「下」なる「天下の足」・「漢の臣民」として位置づけ、従つて又、「上」なる「天子」に「共貢」するものだとして規定する。この点、夷狄を禽獸視・唾棄し、極端な排外的傾向を持つ者、将又、匈奴攻伐論者と賈誼との間には、甚しい差違が存する。あるいは又、中国の文化・威信が損傷を被つたが故に発現した中華思想・夷狄蔑視ではあったが、彼の場合、それが直ちに保守排外には向かわず⁽¹⁴⁾、それとは逆に国家的自負心を傷つけた張本人、匈奴に對してまでも、王道政治という道德的政治理念をもつて対応し、中国文化・秩序の中に包摂し位置づけようとする。その点にこそ、賈誼の夷狄観の特質を見出し得るのである。

三、夷狄対策の原理

臣、聞く、強國は智を戦わし、王者は義を戦わし、帝者は徳を戦わす。……今、漢帝は中國なり、宜しく厚德を以て四夷を懷服し、明義を擧げて、博く遠方に示すべし、則ち舟車の至る所、人迹の及ぶ所、畜と為らざるは莫けん。又且つ孰れか敢て怙然として帝意を承けざらんや。(匈奴篇)

「帝」として天下に君臨している「漢」は、「徳を戦わすべきだと自覚・自負し」、「厚德」によって「四夷を懷服」せねばならぬ。先にも触れたが、賈誼が思念した夷狄への対応の仕方とは、王道政治という道德的政治理念であつた。従つて、彼は夷狄に對する攻戰討伐を否定する。

旁午走急して数十万の衆を北方に積まば、天下安にか食を得て而して之に饋らん。事に臨みて而して重困せば、則ち工(＝功)を爲し難し。(同右)

彼がかく述べるのは、それを明示している。兵站確保の至難さを上げ、あるいは戦闘能力の違ひ(劣弱なること)を匂わせて⁽¹⁵⁾匈奴攻伐即ち武力侵略を上策としては採らないのである。かわりに彼が提示するのは、「三表・五餌」の策であり、更には又、「戦徳・徳勝」の策である。彼は言う、

臣、陛下の爲に、三表を建て、五餌を設けん。此を以て單于と其の民を争うときは、則ち匈奴を下すこと、猶お稿を振るうがごとくならん。(同右)

と。先に、「流涕すべき」状態として「倒縣」現象を上げ、それを解放できぬことを、

国に人有りと爲すか。(本伝)
具亡きこと甚だし。(同右)

と、口を極めて非難していたのに対して、彼が提示する「三表・五餌」その他の匈奴への施策こそは、「槁(枯葉)を振るうがごとく」に易く匈奴を打ち降す策であると言うのである。更に「三表・五餌」・「戦徳・徳勝」策の効用を説いては、

臣の計を行はば、請う、必ず單于の頸を係けて而して其の命を制し、中行説を伏して而して其の背に笞ち、匈奴の衆を挙げん、唯だ上の令のままならん。(同右)

という。匈奴の「單于」の死「命」を「制」することは無論のこと、漢の背臣・中行説を捕縛し、「匈奴の衆」をこぞつて漢の臣民となすことが可能だということ。かくして、漢王朝の威信は回復され、賈誼自身の面目が施されるのである⁽¹⁰⁾。これらは、彼が余程自己の対匈奴策に自信を抱いていたことを証する言説であろうが、それよりも何よりも、

陛下何ぞ能者をして一たび試みに此を理めしめざる。……此れが為に一官を立て一吏を置き、以て匈奴を主らしめん。誠に此れを能くする者は、千石を以て之に居らすと雖も可なり。(匈奴篇)

陛下何ぞ試みに臣を以て属国の官と爲し、以て匈奴を主らざらしむるや。(本伝)

と述べ、匈奴を統治するには一官一吏を設置すべきだと主張し、その上に彼自らがその任に当ることを希求していることから判断して、その自信の程が窺えるというものである。

賈誼は、漢帝と匈奴との勢力の逆転現象「倒縣」を解き放つために、匈奴の現状分析を試みている。

竊かに聞く、匈奴当今遂に羸^{つか}ると。此れ其れ武を示し利に味^{あじ}ますの時なり。而して隆義渠・東胡の諸国、又頗る来降す。臣の愚を以てするに、匈奴且に動疑(「困惑」)す。一材を將つて奇を出だし、厚贄^{こうし}以て責むれば、漢、大いに興らずんば已まず。(匈奴篇)

多くの兵卒を、いたずらに辺境守備のために繫留させておくのは、兵站確保に苦勞するだけで、決して上策とはいえない。匈奴は今、疲弊

した上に更に彼らを取り巻く義渠・東胡の諸国が漢王朝に來降しているという状況に抛り込まれ、動搖惑亂している。今こそ匈奴に「武を示し」彼らを「利に味ま」し、有能なる人物を採用しては「奇」計を案出させ、「厚贄」によつて匈奴を攻略すべきだと彼はいう。即ち、武力による侵略を説かない⁽¹¹⁾代りに、賈誼は、先にも触れた文化侵略(彼の王道思想を想起すれば足りよう)と、ここにいう經濟侵略とを提示するのである。

さて、以上によつて彼の対匈奴策が文化侵略と經濟侵略との両面から説かれたものであることを確認し得たので、次に具体的な匈奴策の一つ「三表・五餌」の策を検討することにしよう。果して、匈奴に対する「三表・五餌」は、文化的經濟的のいずれの面に関わる侵略原理を反映したものであつたらうか。

四、「三表・五餌」

先ず、「三表」から検討しよう。

臣、且に事勢を以て天子の言を諭し、匈奴の大衆をして陛下を信ぜしめん。言を通ずることを為すのみ、必ず行ひて而して易えず、夢中、人に許さば、覺めて且つ其の信に背かず。陛下の己諾は日出の灼灼たるが若し。故に君の一言を聞けば、微遠有りと雖も、其の志、疑はず。仇讐の人も其の心殆まず。此くの若きときは則ち信諭されん。図るところ行はれざること莫けん。(匈奴篇)

一表で示されるのは、漢帝が匈奴の大衆から信頼を勝ちとることである。そのためには、一旦承知したことは、中途で変更することなく、必ずや実行することだという。さすれば、たとひ遠くの者であろうが、將又「仇讐」の者であろうとも、漢帝を疑殆することはない。

さて、次の一表はというに、臣、又且に事勢を以て陛下の愛を諭し、匈奴をして之れ自ら視せ

しめん。苟くも胡面にして而して戎状なる者、其れ自ら天子に愛せらるるや、猶お弱子の慈母に還ふがごとし、と以為はば、此くの若きときは則ち愛論されん。一表。(同右)

と述べており、ここでは少しく具体性を欠くが、「胡面・戎状」という野卑なる匈奴にしも漢帝が仁愛をもつて対処していることを表明し、かつ又それを匈奴自らに認識させることである。最後の一表は、次のごとくである。即ち、

臣、又且に陛下の好を諭し、胡人をして之れ自ら視せしめん。苟くも其の技の長ずる所と、其の工なる所と、一に以て天子の意に当るべく、此くの若きときは則ち好論されん。一表。(同右)

と。匈奴に対し漢帝の好意あるいは好みを周知徹底させる。具体的には、匈奴の持つ技術面での長所を全て漢帝が自己のために用立てることによって、漢帝の好誼を匈奴に自覚させる、(彼の所謂「好論」、これが最後の一表である。

以上、「三表」を要するに、匈奴に対して漢帝が「信・義・仁・愛」・「好」誼の三者を表明し、のみならず、それら三者を周知徹底(論)させる、ということになろう。彼自ら三表を要約して、

人の状を愛し、人の技を好するは、仁道なり。信を大操となすは、常義なり。愛好実有り、已諾期すべくんば、十死一生、彼必ず將に至らんとす。此れを三表という。(匈奴篇)

という。先に見た「愛論・好論」を「仁道」、更に「信論」を「常義」とであると規定し、これら三者を漢帝が匈奴に対して表明し、しかも「実有り」、「期すべく」すれば、必ずや匈奴は漢帝を慕つて来至するであろう、と結論づけるのである。

さて、これら「三表」の策は、彼の対匈奴政策の原理二つ——一つは王道政治に名を借る文化侵略、今一つは匈奴の欲望につけこむという経済侵略——に照らして、どうであろうか。結果は歴然としている。即ち、彼が匈奴策としてここに提示した「三表」こそは、「仁道」とい

い、「常義」といい、古来、儒家が唱導し来たった王道政治と呼ばれる文化的侵略の原理の具体策であったといえるのである。

「三表」に併行して説かれる「五餌」の策は、どうであったか。「五餌」と称される通り、五つの「餌」があるのであるが、余りに煩雑になるので、ここでは、最初に述べられる「一餌」のみ紹介することにする。

匈奴の来たる者は、家長已上は固より必ず繡を衣る、家少者は必ず文錦を衣る。將に銀車五乗を為り、彫画の駕を大にし、四馬、緑蓋を載せ、数騎を従え驂乗を御せん。且つ單于の出入と雖も、軽々しく此れを都べず。匈奴の降る者をして、時々此れを得て而して之を賜はしめんのみ。一国の之を聞く者・之を見る者、心に希ひて而して相い告げ、人々冀幸して以為はん、吾、至らば亦以て此れを得べしと。將に以て其の目を壊らん。一餌。(匈奴篇)

匈奴からの「来・降」者に対しては、彼らを(自国の王・單于ですらも及ばぬ程に)「繡・文錦」で美々しく着飾らせ、豪奢な事駕を作つては、それを持ち廻させる。これによって、匈奴の「目」の(視覚的)欲望をかりたてて彼らを漢帝国に靡かせる、という。「餌」とは即ち、匈奴を漢帝国に誘至来降させるためのえさなのである。従つて、「五餌」とは、五種類の「餌」に外ならない。彼はこのえさを、別に「賞」だとも言っているが、そのいづれであろうとも、「餌」は、えさとして最大限有効に撒かれなくてはならない。彼が、恩賞の与え方は、一国の人の心を傾かせるに足るようでなければならぬという所以である。さて、彼ら匈奴の視覚的欲望を駆り立てては、彼らを漢帝国に来降させるといふ「一餌」に続けて、更に四種の「餌」を掲げる。即ち、珍味を饗応して彼らの「口を壊り」、妙な音楽を聴かせて匈奴の「耳を壊り」、豪奢なる家屋を与え、より一層の美味なる飲食物を饗しては彼らの「腹を壊り」、更には、彼らに官職を与え君側に侍らせて彼らの「心を壊らん」といふ。「五餌」を要約して、賈誼は、

故に其の耳を牽き、其の目を牽き、其の口を牽き、其の腹を牽き、四つの者已に牽き、又、其の心を引く、安んぞ来り下らざるを得んや。胡ぞ抑^{おさ}んせんや。(匈奴篇)

という。これによれば、「五餌」の中、「心を壊る」ことが最も高度なものとされているようであるが、匈奴の欲望を挑発しながら手懐けて行けば、必ずや彼らは漢帝国に降参せざるを得なくなる、と賈誼は断言する。

最早や彼の対匈奴策の原理に照合するまでもない。「五餌」の策が経済的匈奴侵略であることは明白である。

ところで、上述したが如き「三表・五餌」の策は、対匈奴策として果して有効なものであつたろうか。この興味ある間に一つの示唆を与えてくれるのは、『漢書』匈奴伝に見える中行説の言葉である。この中行説とは、漢の文帝が対匈奴和親策の一環として、漢の公主を匈奴王・单于の閼氏(≡皇后)として送り込んだ際に、そのもり役として無理やり匈奴に遣り込まれた人物である。彼は、漢庭を去るに当って、「必ずや我、漢の患を為さん者なり」との捨て科白を遺した。匈奴伝に立ち帰ろう。

中行説、既に(匈奴に)至り、因りて单于に降る。单于、之を愛好す。初め、单于、漢の繒絮・食物を好む。中行説曰く、匈奴の人衆は漢の一郡に当る能わず。然れども之より強き所以の者は、衣食(漢に)異にして、漢に叩(≡仰)ぐこと無きを以てなり。今、单于、(匈奴の)俗を變じて漢の物を好む。漢の物、什が二(十分の二)に過ぎずして、則ち匈奴^{こも}尽く漢に帰せん。其れ、漢の繒絮を得て、以て草棘の中に馳せしめよ、衣袴皆な裂弊して以て(匈奴の)旃裘の堅善なるに如かざるを視さん。漢の食物を得て、皆な之を去り、以て(匈奴の)重酪の便美なるに如かざるを視せよ、と。

匈奴の全生活物資の中、漢からの輸入物資が二割を占めるようなことになれば、最早や匈奴は漢帝国に併呑されることになるのだと彼は匈奴

奴王に警告する。が、ここで重要なことは、「初め、单于、漢の繒絮・食物を好む」という記述である。事実、匈奴は毎年秋ともなれば漢の辺境に侵入し、生活物資を掠奪していったのである^{四〇}。賈誼の案出した「三表・五餌」の策は、匈奴のころした性向を見抜いたものであり、中行説を震撼させる程に効果的な匈奴政策であつたといえよう。

賈誼が自己の匈奴策に余程の自信を抱いていたであろうことは先にも触れたが、この「三表・五餌」の策をいざ実行する段になれば、莫大な費用が高むと考へてか、その解決策をも提示しており、彼の匈奴対策の展開は、執拗且つ周到であつた。

請う、敢て御府の銖金・尺帛を費すこと無からん。然り而して臣に余資有り。……国に二族有りて、方に天下を乱す。匈奴の辺患を為すよりも甚し。(たとへば)上下をして蹢逆し、天下をして竊貧ならしむ。盜賊罪人、蓄積して已むこと無し。此れ二族の祟を為すなり。上、二族を去りて国を乱さしめざれば、天下治まり富まん。臣に二族を賜ひ、匈奴を崇して過足せしめん。

(匈奴篇)

解説を要すまい。「盜賊・罪人」の「二族」を貰い受けることができれば、彼らが漢帝国内部に流していた害毒を、漢帝国国庫からの援助を一切仰ぐことなく、そっくり匈奴に向けさせることが可能だとさえないのである。

五、「戦徳・徳勝」

上述した「三表・五餌」の対匈奴政策に並行して、なお補足的にはあれ説かれるのが、「戦徳」・「徳勝」の策である。

先に見た「三表」・「五餌」の両策は無論、同時並行的に実施されるべきものであるが、賈誼は、これら両策が施行された後には、新しい状況が生まれることを、次のように説いている。

三表已に論し、五餌既に明かならば、則ち匈奴の中、乖きて相ひ疑ひ、单于をして寝、寐を安んぜず、食、口に甘からず、劍を揮ひ弓を挟みて而して穹廬の隅に踰り、左に視、右に視て以て尽く仇と為さしめん。彼れ其の群臣(漢に)走ること母からんと欲すと雖も、虎の後に在るが若く、衆(漢に)来ること無からんと欲すと雖も、或いは之を擄られんことを恐る。此れを勢という。(匈奴篇)

「三表・五餌」策の施行は、匈奴の王(「单于」と群臣、匈奴の王と民衆との間に亀裂を誘発し、疑心暗鬼、单于是匈奴の民衆全てを仇敵と思うようになる。こうなれば、单于の下で仕えていた群臣、あるいは又衆庶もその地に止まりたくとも、それが叶わぬ趨勢となる。こうした動向は雪崩現象をひき起こし、衆庶は勿論のこと、その貴人までもが自分達の王を捨てて漢帝を慕つて降至することになる。

然して其の貴人の单于を見ること、猶お虎狼に逢うがごとし。……其の衆の將吏を見ること、猶お仇讐に遇するがごとし。南に郷ひて漢に走らんと欲すること、猶お水の下に流るるがごとし。將に单于をして臣の使無く、民の守り無からしめんとす。夫れ惡んぞ頸を係け頓顙して陛下の義に帰せざることを得んや。此れを戰徳と謂う。(匈奴篇)

言を要すまい。賈誼は、これをしも「戰徳」(徳を戦わす)だという。彼は、「強国は智を戦わし、王者は義を戦わし、帝者は徳を戦わす」(匈奴篇)と述べていたが、これによれば、文化的侵略策である「三表」は無論のこと、経済的侵略策たる「五餌」をも「戰徳」(「徳を戦わす」)だと位置づけていたことが知れるのである。彼にしてみれば、匈奴の王と漢帝とが群衆を奪い合つて、その群衆が单于を去つて漢帝を慕つてやつて来るのだから、まさしく王道政治だと考えたのであろうか。兎も角、この「戰徳」の策というのは、「三表・五餌」策が施行された後に採られる謀策で、匈奴王单于とその群臣・民衆との離間策であり、

血縁・地縁的連帯を内部的に崩壊させることを企図したものだといえる。

さて、今一つの「徳勝」の策とは、いかなる内容を持つ政策であったか。

彼れ匈奴略せられ、且つ衆を引ききて遠く去る、此れを連ねるに数有り。(匈奴篇)

「徳勝」の策は、右の前置きから始まっている。即ち「三表・五餌」の両策、更に「戰徳」の策が施行されれば、必ずや匈奴の民衆は漢帝国に靡き服することになるのであるが、匈奴の王单于是これらの諸策に抗して、自らの民衆を引き連れて漢の辺境から更に遠く北方へと退き、漢帝国に近寄るまいとするであろうが、それをしも打破する方法として提示されたのが、この「徳勝」の策である。ここで具体的に提案されているのは、関市と顓榮との二つである。彼は言う、

夫れ関市なる者は、固より匈奴の犯滑し深く求むる所なり。顓榮はくは上、使を遣はして厚く之と和せしめ、已むことを得ざるを以て、之に大市を許すときは、……則ち胡人、長城の下に著かん。是れ王、將に強めて之に北せんとすれば、(衆)必ず其の王を攻めん。……此れ則ち亡竭すること、立ちて待つべきなり。賜ふこと大にして而して愈々飢え、財多くして而して愈々困しまん。漢は心に希ひ而して慕ふ所なり。則ち匈奴の貴人、其の千人を以て至る者は、其の二三を顓はし、其の万人を以て至る者は、其の十余人を顓はさん。夫れ顓榮なる者は、民を招くの機なり。故に遠きは五歳を期し、近きは三年の内を期し、匈奴亡びん。此れを徳勝という。(匈奴篇)

と。聊か引用が長くなったが、要するに、彼ら匈奴の垂涎的である、市場への出入を許可し、更には顓榮を懸けて、彼ら匈奴の北方への逃避行を阻止するという。あるいは又、「賜ふこと大にして愈々飢え、財多くして愈々困しまん」と見えることからして、彼ら匈奴を奢侈と

いう悪風に染まらせ、欲望を刺戟し募らせて、両国国境に釘付けにするとの策である。賈誼によれば、この策を施行すれば、遅くも五年、速ければ三年の中に匈奴は自ら滅亡するであろうという。ならばこそ、これを「徳勝」という。「徳勝」とは、漢帝と匈奴王單于とが「戦徳」（即ち徳を戦わす）し、その結果、匈奴が滅亡するというのは、漢帝の「徳」が匈奴王のそれに「勝」った、ということの意味している。従って、五年から三年の中に匈奴を滅亡し得るという「徳勝」の策とは、無論、単独の策として成り立つわけのものではなく、それ以前に、「三表・五餌」は勿論、「戦徳」と呼称された諸策、これら全てを総結集した後を試みられる方策なのである。

さて、「戦徳」の策については、既に彼の対匈奴策の原理との照合を済ませており、ここでは「徳勝」の策の場合のみ考えれば足りる。賈誼は匈奴策として、文化的と経済的との両面からの侵略を主張していた。「徳勝」策の骨子が、市場への匈奴の出入を許可し、来降者を時として顕栄にし、あるいは匈奴に奢侈の風潮を弥漫させては、彼らの滅亡を待つことであつたことを想起すれば、これらが経済的側面からの侵略を意図したものであることは明白である。「戦徳」の策を分析した所でも少しく触れたが、賈誼は、これら経済面からの匈奴侵略をも「徳勝」と「徳」の字を冠して呼称するのである。

一体、儒家が唱導し來つた王道政治（あるいは思想）とは、例えば孟子の説く如く、経済政策を多分に加味するものではあつた^四。が、それは人民の経済生活の安定を計るためにこそ説かれたもので、民衆——たといそれが匈奴の民であれ——の間に奢侈の惡習を弥漫させて、人民の経済生活を混乱に陥れるために説かれようとは！あるいは又、王道政治の今一つの側面、即ち、法刑によるのではなく、道徳——仁であれ、仁義であれ——を以て人民を導き化すという点に関して言えば、「戦徳」の策で説かれた君臣、あるいは又、君民の離間を助長するが如きは、王道政治という所の「徳」の名に値せぬものではある。そうであつた。

漢代の儒家は、先秦の儒家からは大きく変容していたのであつた。ともあれ、賈誼が匈奴対策の原理・理念として掲げたのは、「王者は義を戦わし、帝者は徳を戦わす」とか、「今、漢帝は中国なり、宜しく厚徳を以て四夷を懷服し、明義を挙げて博く遠方に示すべし」という、古来、儒家が唱導し來つた王道政治ではあつたが、それが具體的な匈奴対策として立ち現われた時、その内実は、上述した通り、先秦儒家のそれとは大きな隔りがあつたことが知れるのである。

賈誼の提示した匈奴対策は、以上で紹介し尽したと思われるので、次には、彼と同時代、あるいは彼に先行する人達の匈奴対策を瞥見し、両者の比較を通して彼の匈奴策の特徴を明らかにしてみよう。

六、鼂錯らの匈奴策

『漢書』匈奴伝賛に、

久しきかな、夷狄の患を為すや。故に漢興りて自り、忠言嘉謀の臣、曷ぞ嘗て籌策を運らして、相い与に廟堂の上に争はざらんや。高祖の時、則ち劉敬あり。呂后の時、樊噲・季布あり。孝文の時、賈誼・鼂錯あり。孝武の時、……人、見る所を持し、各々同異有り、然も其の要を總ぶるに両科に帰するのみ。縉紳の儒は則ち和親を守り、介冑の士は則ち征伐を言う。皆な一時の利害を偏見して、未だ匈奴の終始を究めず。

と見える。匈奴対策に関して活躍した者を列ねて、班固は、劉敬・樊噲・季布を挙げ、更に賈誼と同じく文帝に仕えた者として鼂錯を挙げている。

今、各人の時代背景には触れず、彼らが開陳している対策の要点をのみ見ると、次の如くである。先ず劉敬（婁敬）であるが、匈奴との和親を唱え、漢の公主を匈奴王の後として遣り込み、その子孫を漢の臣民とするとの考えを述べ、更に、匈奴の侵入に対する防備として、斉

・楚の名族、燕・趙・韓・魏の後裔・各地の豪傑・名家を関中の地に強制的に遷徙せしめる意見を具申し、高祖に善諾されている²⁴⁾。

次に、呂后の時の樊噲と季布とである。これは、(匈奴王・冒頓单于から屈辱的書信を受取り激怒した)呂后が、群臣に匈奴攻撃の可否を諮った際、両者が発言したものである。樊噲は征伐賛成の言を吐き、季布は高祖の甜めた「平城の恥」の屈辱と恐怖とを呂后に想起させ、自国の武力・兵力の劣弱さを考え、あるいは又、禽獸同然の夷狄が述べる悪言など、無視すべきで氣に止めることはないとして、征伐攻戦を説く樊噲に反論している²⁵⁾。

上述の三者と異り、賈誼と同じく文帝に仕えた鼂錯の匈奴対策は、入念に展開されている²⁶⁾。彼は三度に亘って兵事について上言しているが、先ず初回の上奏に見えるのは、(1)辺境守備のためには、良将を得なければならぬ、(2)中国が匈奴と戦う時には「万全の術」を用いて戦うべきである、以上二点である。万全の術とは、彼に従えば、(ア)敵に十倍する兵力を動員する、(イ)匈奴の長技²⁷⁾が生かされる形勢での戦闘では中国に來降している匈奴・義渠の部隊に戦わせ、中国の長技²⁸⁾が生かせる土地では漢兵が前面に出て戦うという、敵軍に対しては決して自軍の短所を当てさせることなく、常に敵軍と同等、あるいはそれに勝る戦闘技術・能力で戦えるようにする²⁹⁾、以上二つの内容を持つ戦術のことである。匈奴策に関わる二度目の上奏では、(3)戦功のあつた者には恩賞を与えること、(4)辺境に城邑を築き、罪人を始めとして、その他一般庶民で官爵欲しさに志願する者に至るまで、全てに家屋を与え、更に自活できるようになるまで衣・食を国が保証することを条件に、その城邑に遷り住ませ、辺境防衛に従事させること、との二点が指摘できる。三度目の上奏は、既に(4)が文帝の政策として実施された後の上奏で、(4)を補完するものをも含んでいる。即ち、(5)辺境に移り住まうようになった者達を、その地に長く居つかせる諸々の方策を採る必要がある。例えば、(ア)医者と巫覡とを置き、人民の疾病や祭祀を掌らせる。(イ)結

婚を奨励する。(ウ)人の生死には相互に扶助させる、等々、(6)辺境民を軍事教練する、(7)果敢に敵軍と戦わすために、賞を厚くし罰を厳しくする、以上、三点に加えて、(8)これまで採って来た匈奴との和親策を破棄せよ、というものであった。その一段を引用してみよう。

陛下、匈奴を絶ちて与に和親せざれ。臣、竊に意うに、其の冬、(匈奴)來たり南せん。壹たび大治すれば、則ち終身創りん。

匈奴と断交して和親しなければ、匈奴は南下して中国の辺境を侵すであらう。その時、大打撃を与えれば、匈奴は一生涯立ち直れないであらう、と彼はいうのである。

以上、賈誼に先行する三人の匈奴対策と、同じく文帝に仕えながら、賈誼にやや後れる鼂錯³⁰⁾のそれとを紹介したが、四人の対匈奴方策の中、樊噲・季布は問題外として、劉敬のそれは子孫の代まで待つという、迂遠ともいえる策であり³¹⁾、矢張り、最も後に出た鼂錯の匈奴対策こそが出色であるといえよう。彼は匈奴との全面戦争を前提として、防衛策(先の(1)(4)(5)・征伐攻戦策(1)(2)(3)(6)(7))を準備し、文帝に、和親策の破棄・匈奴との攻戦を迫る。彼の言葉を借りれば、防衛・攻戦との両面に亘る「万全の術」を展開したと評し得よう。

さて、漢初に展開された匈奴対策は、これら四人に賈誼を加えれば、足りるのであるが、賈誼の匈奴対策を他の四者のそれに比べる時、いかなる特性を指摘し得るであろうか。和親・攻戦、その立場こそ異なれ、先ず、賈誼が、強烈な中華意識から、儒家の王道思想に立論の根柢を置いてその方策を展開しているのに対して、他の四人には立論の根柢となる思想的基盤が欠如していることを指摘し得よう。次には、賈誼が、他に異って、経済的侵略をも含む文化的側面での侵略に着眼していること。第三には、同じく匈奴の特性を分析するにせよ、賈誼の場合は内面的特性を捉え³²⁾、その弱点を攻撃することを説くこと等

を上げることができる。

以上によって、賈誼の対匈奴策の特性は明らかに became と思われる。

七、結び

中国が帝を号しながら、夷狄の諸侯となつてゐる状況（「倒縣の勢」）をそのままにして、何ら有効な対応がなされない状態を、賈誼は「流涕すべき」ことだと評した。実際には、文帝自身、騎馬演習をやったり、自ら軍を率いての匈奴親征を決意したこともあり⁸¹⁾、重い軍糧補給の負担に苦しみながらも、長い国境線に多くの守備兵を配して国防の充実が計られてはいたのである。しかしながら、いみじくも劉敬が述べているが如く、匈奴は「未だ武を以て服すべからず、……未だ仁義を以て説く可からざる」状況であつた⁸²⁾。獸聚鳥散・神出鬼没、影を搏執するが如き騎馬遊牧民族・匈奴に対して、まこと漢帝国は翻弄されていた感がある。やむを得ず、屈辱的和親策に甘んじざるを得ない状況の中で、賈誼は、古来、儒家が唱えて来た王道思想に拠りながら、それを変質拡大させて経済侵略を含む文化侵略という新たな方策を、対匈奴策として提示して見せた。「三表・五餌」・「戦徳・徳勝」の策がそれであつた。匈奴に対して漢帝の信義を示し、漢朝への来降者や使者達には、恩賞を与える要領で、豪奢な衣・食・住の生活を供し、官爵を与えて顕榮にし、一方では、王と群臣・衆庶とを離間させ、奢侈の風を煽り、関市を開放し、……等々。賈誼は、人間の固有する欲望に着目し、それを肯定し、また、その点を衝いたのである。匈奴のもつ質朴剛毅の風を、欲望を刺戟し増大させることによつて奢侈の弊風の中に陥れ、彼らの精神的崩壊を企図した、文化侵略であり、経済侵略であり、心理的戦術であつたといえる。

なる程、賈誼が提示した和親策を基盤とするこれらの匈奴対策は⁸³⁾、昆錡の唱えた征討論の持つ華々しさ、積極性こそ見られないが⁸⁴⁾、かといつて、例えば樊噲の如き、虚勢を張つての征討論ほど内実のないものも、またないのである。従つて、賈誼の匈奴対策を評価する場合に、注意すべきは、和親策であるから当然これは積極性を欠いていよ

うとする考えである。「三表・五餌」の策とは、結局、匈奴来降勧誘策にしか過ぎない、と見做すことは易い⁸⁴⁾。だが、そうだとすれば、匈奴統治という困難なる任に当らうと自ら買つて出ている賈誼の積極性と熱意とは理解し得ないものとなる。彼が自らの匈奴対策にあればどの自信を抱いたのは、人間の心理分析の的確さに由来している。あらゆる感覚器官（耳・口・目・腹・、そして心までも）を刺戟して、匈奴を物質的のみならず精神的にも欲望の虜とするというのが、彼の対匈奴策なのだ。果せるかな、匈奴王たる「单于是、漢の繒絮食物を好」んだし、中国物資の増加傾向は、单子の寵臣・中行説を畏怖せしめた⁸⁵⁾。のみならず、奢侈の風潮は匈奴に弥漫し、先に中国物資の増加を恐懼した中行説の心の中にまで、意識されぬ間に浸透していたのである⁸⁶⁾。それ程までに、賈誼の匈奴対策とは有効、かつ現実的政策であつたのである⁸⁷⁾。彼の説く対匈奴策に欠陥があるとすれば、それは、儒家の唱えた王道思想が持つ限界そのものを意味していよう。そもそも、王道政治こそは、同質の文化を共有する民族間、あるいは国家間に於いて通用しこそすれ、異質な文化を有する者に対しては、一方的な文化侵略・文化強要であり、武力を以てする侵略を伴わぬ限り、受手から拒否されれば、それで終るのである。彼は、この王道思想に立論の根拠を置いたのであつた。「王者は義を戦わし、帝者は徳を戦わす」（匈奴篇）と。

最後に一言すれば、「三表・五餌」の策は、早に班固によつて、「其の術、固より以て疎なり」と酷評されたが、これは利害打算・欲望という極めて卑俗な人間の心理を扱つたものであり、かつて儒家が説くを憚つて触れなかつた問題でもあり⁸⁸⁾、その酷評も尤もやも知れぬ。

〔注〕

- (1) 『漢書』賈誼列伝の筆者抄訳。以下、『漢書』賈誼列伝からの引用は、全て本伝と略称する。
- (2) 例えば、諸公王の勢力削減についていえば、推恩の令が出され、あるいは景帝・塩錯のコンピによって、些細なミスをも理由に封土を削る策が進められた（これは『呉楚七国の乱』の原因となった）。それ以後も、酎金の律、左官の律、附益の律等の法令を出して諸侯を無力化させる方策がとられた。
- (3) 『漢書』は「以」を「目」に作るが、本篇では全て「以」と改めている。
- (4) 例えば、蘇軾なども「三表五餌、人知其疎」（『上神宗皇帝書』）と、一語句で片付けている。
- (5) 『新書』の成立については、諸説あるが、今、余嘉錫『四庫提要辨證』新書「古史辨」第四冊上編所収、金谷治『秦漢思想史研究』平楽寺書店一九八一年、三〇五ページ〜三〇六ページの説に従って、匈奴篇を独自の旧本の伝統を持つものと考ええる。なお、『新書』の底本は、百部叢書本（盧氏抱經堂本重校刻）とする。愈越は、盧文弨の校定を「誦漢書、非治賈子也」（『諸子平議』卷二十七）と批判しているが、匈奴篇に限定して言えば、『漢書』賈誼伝と重なり合う所は一切なく、その点、盧氏校定本で支障はないと考える。
- (6) 『漢書』には「執」に作るが、文意を取り易くするために「勢」字に改めた。また、引用文中に見える括弧内に示された語句は、筆者が補ったものである。以下、同じ。
- (7) 例えば、高祖の死後、その末に人である呂太后に送られて来た匈奴からの文書には、「孤憤之君、生於沮沢之中、長於平野牛馬之域、數至辺境、願遊中國、陛下下独立、孤憤独居、兩主不樂、無以自虞、願以所有易其所無」（『漢書』匈奴伝）とあった。あるいは又、文帝の時、中国が尺一の腊を送ったのに対し、一尺二寸の書が匈奴から送られて来たとし、従って又、匈奴は印封を長大にし、その文辞を倨傲にした（匈奴伝）等々。
- (8) 那波利貞『中華思想』、『岩波講座・東洋思潮』第三分冊、一九三六年、五三
- (9) 『漢書』匈奴伝の贊に、華仲舒の言として載せられている。これと同じ内容を持つものに、例えば、『冒頓殺父代立、妻羣母、以力為威、未可以仁義説也』（『漢書』劉敬伝）、「夫匈奴独可以威服、不可以仁畜也」（『漢書』韓安国列伝に王恢の言として記載する）などがあり、夷狄を禽獸視することは、この漢代にも珍しいことではない。
- (10) 以下、『新書』匈奴篇からの引用は、全て匈奴篇と略称する。
- (11) 重澤俊郎『原始儒家思想と經學』岩波書店、一九四五年、一八二ページ参照。
- (12) 『漢書』賈誼列伝に、「令君君臣臣、上下有差、父子六親各得其宜、姦人亡所幾幸、而羣臣衆信、上不疑惑」などに見える。
- (13) 『漢書』匈奴伝に、漢の使者と、匈奴側を代表する中行説とが、兩國の風俗・文化（例えば、老人の扱い方、妻帯の男子が死亡した後の未亡人の身の処し方など）について議論しているが、匈奴側は中国の風俗、習慣の御仕着を拒否していることを想起したい。
- (14) 注(8)で触れた那波氏の説では、「國家的自負心・國家的自尊心が傷けられた場合に、中華思想は乃ち極端なる保守排外傾向と為りて現はれて来る」とあるが、賈誼の場合、保守排外傾向は見えないのである。その点、那波氏の論は公式的に過ぎよう。
- (15) 原文に「臨事而重困、則難為工矣」とあることから、そう考えられよう。現実、戦闘能力に於て匈奴が秀れていることは、高祖の甜めた「平城の恥」以来、歴然としていた。
- (16) 『新書』匈奴篇に、「帝之威徳、内行外信、四方悦服、則愚臣之志快矣」と見える。
- (17) 賈誼は、飽くまで「王者戦義、帝者戦徳」（匈奴篇）なる原理に基き、文化的・経済的攻略法を案出しただけで、匈奴に対して武力による侵略は、どこにも説いていないのである。
- (18) 底本には「仁」を「人」、「常」を「帝」字に作るが、『漢書』賈誼伝の顔

師古注に、「仁」・「常」と作るに従う。

- (19) 『新書』匈奴篇に、「凡賞於国者、此不可以均、賞均則国竅、而賞薄不足以動人、故善賞者踴之、駁讎之、從而時厚之、令視之足見也、誦之足語也、乃可傾一国之心、」とある。

- (20) 匈奴の侵攻の方法はというに、彼らは秋に南下し、冬期は塞内に留まり、春になると略奪品を抱えて遠く北方へ帰って行くのである。

- (21) 拙稿「孟子の王道論―善政と善教をめぐる―」、『岡山大学教育学部研究集録第五十号第二』、一九七九年、参照。

- (22) 『漢書』劉敬（婁敬）伝参照。

- (23) 『漢書』季布伝・匈奴伝参照。

- (24) 『漢書』晁錯伝参照。

- (25) 晁錯は、中国・匈奴両軍の戦闘技術・能力―八項目に互つて―を比較分析して、その中三項目は匈奴の技能が秀れており（例えば、騎兵戦）、あとの五項目では中国のそれが長じている（例えば、歩兵戦）と指摘している。

- (26) 注(25)に同じ。

- (27) なお、「以蛮夷攻蛮夷、中国之形也、」（晁錯伝）と見える如く、彼は、中国の兵を煩わすことなく、蛮夷同士を戦わせるのが、中国の夷狄に対する戦術であると述べている。

- (28) 賈誼の治案策上奏は文帝六年のことであり、文帝が晁錯の言に従って人民を募り塞下に徙したのが文帝十一年のことであったこと、更に賈誼が死亡したのが、この文帝十一年か十二年であることから考えて、かく言い得よう。なお、晁錯はこの後も活躍し、次帝景帝に仕え、呉楚七国の乱勃発の起因をも作っている。

- (29) 実際には、劉敬の和親策並びに辺境防衛策は高祖に嘉納された程の、極めて現実的な策であった。

- (30) 晁錯も匈奴分析を行っているが、注(27)の如くであり、それは、外面的事実の分析に留まるものであった。

- (31) 『漢書』文帝紀三年の段に、「涿北王興居、聞帝之代欲自擊匈奴、乃反」と

見え、匈奴伝にはいまいし詳しい記載がある。一旦は匈奴親征を決意した文帝であったが、折しも涿北王謀反の知らせを受け取って、引き返している。

- (32) 『漢書』の劉敬伝に、「天下初定、士卒罷於兵革、未可以武服也、冒頓殺父代立、妻羣母、以力為威、未可以仁義說也、」と見える。

- (33) 「王者戦義、帝者戦徳」（匈奴編）といい、「旁午走急、数十万之衆、積於北方、天下安得食而餓之、臨事而重困、則難為工矣」（同前）というのは、彼自身が征戦論者でないことを表明したものと見えよう。

- (34) 征討論それ自身が本来的に積極性を有するのであるが、「万全の術」という晁錯の征討論は一際輝いており、後の武帝が採った匈奴策は、彼の征討論の現実化されたものであった。

- (35) 伊藤富雄「賈誼の『鵩鳥の賦』の立場」、『中国文学報』第十三冊、一九六一年、八ページ―九ページ参照。

- (36) 『漢書』匈奴伝に、「初单于好漢繒絮食物、中行説曰、……今单于变俗好漢物、漢物不過什一、則匈奴尽歸於漢矣、」と見える。

- (37) 『漢書』匈奴伝に「中行説曰、漢使毋多言、願漢所輸匈奴繒絮米鹽、令其量中必善美而已、何以言為乎、且所給備善則已、不備善而苦惡、則候秋熟以騎馳蹂躪稼穡也、日夜教单于候利害處、」と見えるのは、单于是勿論のこと、中行説ですら、利害打算・奢侈の風に染まっていたことの明証である。

- (38) 「戦徳・徳勝」策で、市場を開放したり、来降者を顕榮にするとの策が説かれていたが、前者については文帝の時より実施され、後者については、景帝の時にその実例がある。この点については、米田賢次郎「前漢の匈奴対策に関する二三の問題」、『東方学』第十九集、一九五九年、に触れられている。

- (39) 荀子は人間の持つ欲望に着目しはしたが、彼の場合、それを人為によって善へと昇華矯正することを説いたのであった。

（昭和59年10月15日受理）